安田女子大学紀要　41，139–153　2013.

異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての「我々」と「彼等」のコミュニケーション問題（15）

――異文化コミュニケーション教育における「幸福」（6）――

青　木　順　子

Happiness in Intercultural Communication Education (6)

Junko Aoki

一個人の幸福感という主観的な感情の充足と，そこに存在する大多数の個人の多種多様な幸福が実現するような，社会全体として見た時の幸福感の存在，すなわち，幸福なる社会の実現，そして，その範囲をさらに広げ，「異なる人々」の属する社会における幸福の実現，という観点を，お互いにどのように関係づけて扱うのかという問いは，異文化コミュニケーション教育が，「教育」として，教育を受ける者の自己実現の達成を手助けする限りにおいて，必然的に出てくる問いである。筆者は，これまで，この問いに答える過程で発表してきた一連の論考において，個人の幸福の実現[1)]，幸福なる社会と個人の幸福の選択との関わり[2)]，異なる人々の幸福なる社会との関わり[3)]，「我々の幸福なる社会」を守ると主張する「我々の愛国心」の存在[4)]，そして，「我々の正義」の存在[5)]，と考察を続けてきた。

「我々と彼等の幸福なる社会」を築きあげることが，過去から現在まで大きな課題のまま残されていることは，戦争や紛争の存在を見れば誰しも理解できる。21 世紀に入っても戦争が一時として消えることがない世界においては，我々と彼等で共有できる記憶を保持する努力が，「我々と彼等の幸福なる社会」を築く可能性として存在している。その努力においては，過去の

1）　青木順子　「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（10）―異文化コミュニケーション教育における『幸福』（1）―」安田女子大学紀要　No. 36，pp. 57–69，2008.

2）　青木順子　「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（11）―異文化コミュニケーション教育における『幸福』（2）―」安田女子大学紀要　No. 37，pp. 35–51，2009.

3）　青木順子　「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（12）―異文化コミュニケーション教育における『幸福』（3）―」安田女子大学紀要　No. 38，pp. 75–89，2010.

4）　青木順子　「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（13）―異文化コミュニケーション教育における『幸福』（4）―」安田女子大学紀要　No. 39，pp. 109–124，2011.

5）　青木順子　「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（14）―異文化コミュニケーション教育における『幸福』（5）―」安田女子大学紀要　No. 39，pp. 127–141，2012.

記憶のとどめ方が現在・未来の社会の方向を決定するという事実を，真摯に受け止めて，我々と彼等の共有の記憶のとどめ方そのものを正義という点で検証していく姿勢が，先ず求められているのである。この我々と彼等の共有の記憶のとどめ方において，最も困難な問題を提起するのが，戦争のような武力闘争である。暴力的な出来事の後で共有できる記憶は，先ず「赦し」をもって始まるしかないと考えられるからである。

しかし，「何」をもって本当に「赦し」となるのかという「赦し」そのものの性質，そして「赦し」に応答して，記憶の共有への努力は「我々」と「彼等」の両方におこり得るのかという疑問，さらに，「我々と彼等の幸福なる社会」の「恒久的な平和を築くために」という理由であれば，「正しい戦争」を仮定してよいのかという問い，は残されたままである。それらへの応答を考察する最初の過程として，本稿では，戦争の後で「赦し」が意味するものと，それが与える幸福への可能性を考えてみたい[6)]。

1．出来事の後の赦し

アリストテレスが，よい人生の活動としてのエウダイモニアの概念を鍛え上げるに至った思考過程を調べると，それが一般に広く認められている通説に従っているのがわかるという[7)]。その一つが，以下のような考え方である。「人生の価値の大部分は，個々人の意志の力によって創り出すことができるものと考える。生涯における多くの出来事は，よきにつけ悪しきにつけ，自分自身の力ではどうしようもないものだが，人は自分自身の行動は大概，自分自身で選択することができる。したがって，不可抗力の災難は除外するとして，エウダイモニアが人間の力で達成できるものならば，それは主として人間の行動に依存するはずである。[8)]」出来事はどうしようもないが，自分自身の行動は選択できるということを，私達は頭では十分理解できるのである。

しかし，それでもなおかつ，出来事によって支配されたかのように自分の行動を感じ，出来事の後の人生は不当に変えられたと言い訳してしまう時がある。人はなぜこのように考えてしまうのだろうか，という疑問が沸いてくる。この疑問に答えるために，「偶然という性質を帯びた出来事が，必ず存在する。」という，明白すぎる事実の提示から，本稿を始めてみたい。

「出来事が，自分の行動の選択肢を変える」ということも否定の余地はないであろう。しかし「出来事が，自分の行動を変える」ということはどうだろう。ここで初めて，首を傾げ，「否，出来事が行動を変えるのではない。自ら選べる行動の選択肢は変わる。しかし出来事そのものが行動を変えてしまうのではないのだ」と，つぶやくのではないだろうか。どんなに過酷で厳しい出来事であっても，そのために与えられる選択肢そのものは激変したとしても，行動を選ぶのは主体としてのその人である。そのはずなのである。もしそうではないなら，私達は出来事後を一体どのように「自分が生きる」というのだろうか。

人生において私達は出来事の偶然性に遭遇するしかない。時には，その不条理さや残酷さに慄くような出来事も含めてである。自然災害や病気，こうした辛い予測不可能な出来事の後，私達

6）本稿には，以下の論稿の一部を修正・付加したものが含まれる。青木順子『虚構世界と現実世界――「小説を読む」と「異文化コミュニケーションを学ぶ」を繋ぐ』7章（pp. 98–105），大学教育出版，2007.

7）アームソン，J. O.　雨宮　健（訳）『アリストテレス入門』岩波書店，1998，p. 31.

8）アームソン，p. 32.

は自分の側の多大な努力でもって「生きる」。しかし，それでも，この「生きる」が可能と思われるのは，そこに「赦しえないもの」は存在せず，そのために「赦し」の努力の必要はないからである。その出来事を引き起こした行使者としての存在がそこにはないのである。あるとすれば，人間の意志の力の範囲を超えたものの存在だけである。とすれば，少なくとも「生きる」努力は，自分の意志，すなわち自分の選択としての行動で始めることができる。

ところが同じ出来事の偶然性でも，殺人や飲酒事故の犠牲者側として出来事に遭遇したとしよう。こうした人為的でかつ不正な行動により引き起こされた出来事の後で「生きる」ために，その正当化し得ないような行為について，不正義の存在が認められることが，本当の意味で「生きる」，「幸福に生きる」ために必要不可欠である。不正が認められて，初めて自らの選択としての「赦し」の可能性が入ってくる。デリダは，赦せない，赦すべきでない，というなら，赦しはないのであり，赦しは，「赦しえないもの」があるところに存在するだけだと言っている[9)]。不正が認められた時，必然的に「赦せない，赦すべきでない」と見なし，今後も赦しの存在を否定するのか，それとも「赦しえないもの」を自らが赦すのかという主体的な選択の問いに，私達は向き合えることになる。

数年前，CNN ニュースを聞いていて，中東のある国で，横恋慕した男性に硫酸をかけられ，顔が完全に焼けただれ変形した若い女性の話が報道されているのを耳にした。彼の不正は認められ，国の法に則って刑罰が与えられることとなった。それは，犯人に同じことをするという，タリオの原理に基づいた報復的な正義である。執行を停める唯一の方法は，被害者がそれを望まないと宣言することしかない。刑の執行が決まった後，被害者の女性は，刑の執行を待つ，その男性から面会を求められ，彼が何を言うのかを聞きたくて，刑務所に赴いたという。続くインタビューでの彼女の話は，以下のようなものだった。「彼は泣き叫んで，『この刑罰を望まないと言ってくれ，言ってくれ』と頼み続けた。私は，彼に，『もしそれを望むのであれば，今，私に謝りなさい。自分のしたことを私に謝りなさい。』と言ったのです。彼は，謝り続け，私は，『わかりました。それでは，私は刑罰を望まないとします。』と言ったのです。」彼女は，そこで赦しを与えたのである。

確かに，男は，自身への刑罰――彼は同じ行為を彼女に情け容赦もなく行ったのであるが―を阻止させようと，必死に謝り続けはした。しかし，彼が心から悔いているのではないことは明らかである。彼は自分の苦痛だけは逃れたいのだ。それでも，彼女は赦したかったのである。そもそも人為的に「自分と同じ苦痛」を彼に与えるという報復的処罰が彼に与えられることを望んでいない自分に気づいているから，彼女は会いにも行ったのである。この刑罰の執行後，初めて赦すとすることもできたし，あるいは，「赦す日は永遠にこないし，赦せない，赦すべきでない」としてもよかったのだ。それでも，誰も赦しを与えない側を責めはしないだろう。責められるべきは，唯一，「赦しえないもの」を産み出した側にのみあるからだ。

にもかかわらず，彼女は刑罰の執行を止めて赦すことを選択した。「赦しえないもの」を赦すことは，赦す側の行き着いた高みによって可能となる。私達は，赦しえないと思える不当な出来事を，そして行為者を，自らの行き着いた赦しの高みにおいて赦すのだ。そして，赦しの後，その高みにおいて，再び「生きる」ことができる。言い換えれば，不正が行われた出来事の後，自らの行動を出来事によって不本意に変えられるのではなく，行動を自らが選ぶという人生の選択

9）デリダ，ジャック「世紀と赦し」『現代思想』2000 年 11 月号.

を自らの手に戻し，その最初の選択である赦しの高みにおいて自らの生を生き続けることができる。ちょうど，彼女がそうであるように，である。

2．出来事の後―「生きる」

他者に向けられる暴力の内，戦争は，明らかに「赦しえないもの」を生じる。なぜならば，それは愛する者の取り返しのつかない喪失を招き，そのせいで正義の天秤のバランスは二度と元通りにはならないからだ。それゆえ不正義を絶えず引き起こすしかない戦争のような出来事の後，それでも赦すという可能性が示唆される時，そのことは，一体何を意味するのであろうか。そもそも誰を，何を一体赦すといいえるのだろうか。戦争に関わる行為者全て，戦争を主張した政治家から戦場に向かうしかなかった兵士，核兵器から戦場で撃ち放たれた弾丸の一発を作ったものにいたるまで，この境界線をどのように私達は引き得るのだろうか。人類の最悪の異文化コミュニケーションの形態である戦争という出来事の後，「幸福に生きる」可能性に開かれているという意味での，本当の「生きる」は，個々の人間によってどのように実現されるのだろうか。赦しとの関係はどのように考えられるのだろうか。

そうした問いに答えてくれる一つの例として，本稿では，一冊の小説，1995 年，ペンフォークナー賞を受賞したベストセラー，*Snow Falling on Cedars*[10] から，戦争という出来事に直面した三人を提示してみたい。第二次世界大戦中の米国，白人のイシュマエルと日系人であるハツエが幼い時から密かに育んでいた恋人関係は，荒涼とした砂漠の日系人収容所から書かれた別れを告げるハツエからの手紙で終わりとなる。戦争という出来事に続いたハツエの日系人としての体験の中で，自分が取るべきだと思われる道はイシュマエルと一緒のものではないことを，手紙は真摯に書いたものであった。イシュマエルと生きていくという選択肢は自分に存在しないとする自らの意志による選択として，イシュマエルとの別離を告げる。彼女の手紙では，「自分はイシュマエルを愛していたが，同時にイシュマエルを愛していなかったのだ」という表現で，それが説明される。

> I don't love you, Ishmael. I can think of no more honest way to say it. From the very beginning, when we were little children, it seemed to me something was wrong. Whenever we were together I knew it. I felt it inside of me. I loved you and I didn't love you at the very same moment. (pp. 353–354)（私はあなたを愛していません，イシュマエル。こう言う以上に誠実な方法は，私には浮かびません。最初から，私たちが小さな子どもだった時から，何かが間違っているようには思えました。私たちが一緒の時，いつも私にはわかっていたのです。私の中ではそれを感じていたのです。あなたを愛していて，そして同時に，あなたを愛していなかったのです。）

戦争という出来事がなかったら，その「何か」は，愛する青年と生きるという喜びの中で認識されることもなかったであろう。しかし，出来事の後，日系人としての自分の体験の中で，それは表出してしまった。振り返って考えれば，どこかに彼といることに対する違和感，正しくなさ，というべき感情がすでにあったことにも気づく。だから「愛していた」と同時に，「愛して

10） Guterson, Davic. *Snow falling on Cedars*, Vintage Books, 1995. なお，本稿では，小説から原文を抜き出した場合は，（注）をつける代わりに原文の箇所の後に頁数を記す。抜き出された原文の後につけてある邦訳は，すべて筆者自身によるものである。

いなかった」という事実が存在したのだと，自分の選択の理由を彼女は表現する。イシュマエルに対して誠実であろうとすればする程，戦争という出来事が彼女に気づかせてしまったことを，この言葉以上に上手く説明することは出来ないのである。そして，寛容で尊敬できる優れた人間であるイシュマエルに，そのまま生きていくことを望み，手紙を終える。戦争という出来事がなければ，疑問もなく，まさに素晴らしい人間であるイシュマエルと彼女は共に生きたであろう。その選び得なくなった選択肢に対しては，ハツエにも辛さがある。しかし，違和感の基になっていた自らのアイデンティティに気づかないふりをして，そして，今取り得る別の選択肢にも気づかないふりをして幸福に生きることも，また彼女には不可能なのである。ハツエにとって，この「生きる」ということは，出来事で変わってしまった選択肢の中から自分の意志で選択し，自分もまた誠実に人生を歩んでいくことである。だから，手紙の最後に彼女は記す。“I am going to move on with my life as best I can.”（p. 354）（「私も自分の人生を一生懸命生きていきます。」）

その後，収容所で，日系人としての同じような経験や夢を分かち合え，家族の暖かい祝福も得ることができる日系青年カブオと結婚する。この決断は，イシュマエルなしで生きることをすでに選んだ後では，「生きる」という点で彼女には正しく思われるものであり，この選択において誠実に前向きに生きていこうとする。出来事の後，変更された選択肢は，往々にして不当で恨みがましいものとして捉えられることが多いからこそ，それでも誠実に「生きる」ことを選択し，幸福に生きようとするハツエの真っ直ぐな姿勢に心を打たれるのである。

3．出来事の後―「生きる」ことを止める

一方，イシュマエルが戦場でハツエからの別れの手紙を読み，ハツエを永遠に失ったとわかった後，彼の部隊は日本軍のいる島への上陸作戦を開始することになる。激しい戦闘が予想される。手紙を残すように言われて，イシュマエルはハツエに書き綴る。

> He said that his numbness was a terrible thing, he didn’t feel anything except that he looked forward to killing as many Japs as possible, he was angry at them and wanted their deaths-all of them, he wrote; he felt hatred. He explained to her the nature of his hatred and told her she was as responsible for it as anyone in the world. In fact, he hated her now. He didn’t want to hate her, but since this was a last letter he felt bound to tell the truth as completely as he could—he hated her with everything in his heart, he wrote, and it felt good to him to write it in just that way. “I hate you with all my heart,” he wrote. “I hate you, Hatsue, I hate you always.” (p. 237)（自分が無感覚であることは怖ろしいことだと書いた。出来るだけ多くの日本人野郎を殺すことを楽しみにしており，彼等の死を願っている以外には何も感じないと書いた。彼等に怒りを感じているし，皆死んでほしいと，そして憎しみを感じていると。そして自分の憎しみについて説明し，世界の誰よりもハツエにその責任があると書いた。実際，今は彼女を憎んでいると。そうなりたくはなかったけれど，最後の手紙なので，出来るだけ真実を書くと感じているのだと書いた。「君を心底憎んでいる。」と彼は書いた。「君を憎んでいる，ハツエ。君をこれからずっと憎む。」）

初めて記される憎悪の感情であるが，手紙を出す気があるわけではないのだ。そこまで書いて彼は便箋を破いて海に捨てる。もし続けて起こる出来事がなければ，いずれ月日がそうした感情を消したのであろう。しかし，そうはならなかった。日本軍との戦いで多くの仲間が悲惨に死んでいくのを見，彼自身も右腕を失う。手術台で切り取られた腕を見ながら意識が薄れていく中で，再度憎しみの言葉を，今度は「口に出す」のである。

Somebody else pricked him once again with morphine, and Ishmael told whoever it was that “the Japs are...the fucking Japs…” but he didn’t quite know how to finish his words, he didn’t quite know what he meant to utter, “that fucking goddamn Jap bitch” was all he could think to say. (p. 251)（誰かが彼にまたモルヒネを打った。彼は誰ということもなく言った。「日本人野郎が，いまいましい日本人野郎が。」しかし，どのようにその言葉を終えるかもわからず，何を自分が意味しているかもよくわからなかった。「あのいまいましい日本人アマめ。」これが，彼が言える全てであった。）

戦後になって初めてイシュマエルがハツエに店で遭遇した時，体調もすぐれず，残った腕の方には食料を握りしめているという不恰好さであり，一方，ハツエは赤子を背中におぶっているという皮肉なものであった。ハツエの得たものを比べ，自分が失ったものは大きく思われた瞬間に，彼の口から思わず出たのは，失った腕について日本人を責める言葉であった。“The Japs did it.” (p.332)（「日本人野郎がこれをしたんだ。」）彼はすぐその言葉を悔やみ謝罪する。しかし，ハツエはそのまま立ち去ってしまう。再度の再会では，混乱状態で，自分が「生きる」ことができないでいることをハツエに伝え，ハツエに一度だけ自分を抱擁してくれることを頼み拒絶される。戦争の後で自分らしさを失い，生きることをとめてしまったイシュマエルの苦しみも，イシュマエルがハツエ以上の重荷――戦場，多くの死者，別れを告げる手紙，失った腕――を出来事から背負ったのであろうこともハツエは理解している。イシュマエルが出来事の後で自分らしさを失ったままで，本当の意味で生きようとしていないことは悲しい。しかし，生きることができないで混乱しているままのイシュマエルを動揺もなく抱擁するという行為も，また彼女には出来ない。イシュマエルがそうである限り，ハツエもまた出来事の後を完全には幸福に生きることができないでいるからだ。

“I’m not talking about love,” he said. “I’m not asking you to try to love me. But just as one human being to another, just because I’m miserable and don’t know where to turn, I just need to be in your arms.” Hatsue sighed and turned her eyes from his. “Go away,” she’d said. “I hurt for you, I honestly do, I feel terrible for your misery, but I’m not going to hold you, Ishmael. You’re going to have to live without holding me. Now get up and leave me alone, please.”(p.334)（「愛についていっているんじゃないんだ。」と彼は言った。「愛してくれって頼んでいるんじゃない。ただ，人間として，僕は惨めでどうしていいのかわからないから，君の腕に抱いてほしいんだ。」ハツエはため息をつき，目をそむける。「行って。」と彼女は言った。「私はあなたの様子に胸を痛めてる。本当に。あなたが惨めなことがとてもつらい。でもあなたを抱くことはないわ。イシュマエル。あなたは私を抱くことなく生きなければならないの。だから起き上がって，お願いだから私を一人にして。」）

その後，ハツエの夫が白人を殺害した容疑で起訴され，それをイシュマエルは新聞記者として裁判で傍聴することになる。第二次世界大戦後 10 年近く経っても日系人への偏見は根強く，証拠不十分なままにも関わらず，有罪判決がほぼ予想できる展開となっていく。裁判が公正さを欠いていることを新聞に書いて欲しいと言ったハツエとの会話の中に，イシュマエルは，不正が向けられたのは自分なのだと強く感じていることが示される。

“The whole thing is wrong, it’s wrong.” “I’m bothered, too, when things are unfair,” Ishmael said to her. “But sometimes I wonder if unfairness isn’t…part of things. I wonder if we should even expect fairness, if we should assume we have some sort of right to it. Or if—” (p. 325)（「全てのことが間違っているわ。間違っている。」「僕も物事が不正な時は気になるね。」とイシュマエルは彼女に言った。「でも時々思うんだ。不正って物事の一部じゃないかってね。もし僕たちが公平さを期待できるかって。何か権利のよう

なものを公正さに持っていると仮定していいものかってね。あるいは……。」）

去っていった恋人，失った腕，こうした自分になされた不正にも関わらず，自分がなぜ他者への不正のために，ましてハツエの夫への不正のために戦わなければならないのだと。その中で，イシュマエルが，ハツエの夫の無実を証明することのできるメモを手にする唯一の人間となる。彼はついに出来事の後，初めて自分が選択する力を与えられたことを感じる。癒えないままの心の傷に関わりあるハツエや彼女の夫の運命を変えることができる選択肢を持ちえたのである。彼は提出することなく，その証拠をポケットに持ち続ける。

4．出来事の後―「生きる」ことの困難さ

小説では，もう一人，不正義に苦しみ，戦争という出来事の後，生きることが上手く出来ないでいる人物がいる。ハツエの夫となった日系人のカブオである。日系人として，ハツエと同じく砂漠の収容所に送られ，ハツエと結ばれる。日系人への徴兵募集に際して収容所の多くの日系人の若者がそうしたように，戦場に出ていく。戦場でドイツ兵を殺し，生き延びて帰った時には，父が約束のもとに支払って手に入れてくれたはずの苺畑は，日系人が取引相手だったことで身勝手な理由をつけられて，戦争中に別のアメリカ人に売却されてしまい，彼の手に入らないことがわかる。戦争という出来事において，収容所送還という不正，戦場で受けたであろう日系人部隊への不正[11]，苺畑にまつわる米国人の不正，彼もまた不正義を被り続けた人間なのである。さらには苺畑の約束を反故にした家の息子の事故死の後，その殺人容疑という不正が彼におそいかかる。無実の罪で裁かれている法廷では，日系人という理由で偏見の眼差しを受け，証言台にたった苺畑の持ち主の未亡人の自分達への不誠実な言葉に怒りも覚える。不正の被害者として，こうした一連の不正に納得など出来るわけがない。でも，最終的に独房に戻ってくる時，彼が鏡に唯一見るのは，戦争中に人殺しとなった自分自身なのである。戦場で，まだ少年のような幼さを残したドイツ兵は，その様子からみてドイツ語でカブオに命乞いをしていると思われるにも関わらず，その手が伸びるのを見て，カブオは咄嗟に至近距離で撃ち殺す。手の先にあったのは水筒。まさに不条理の死。殺人。

> It has not a thing he had control over. His face had been molded by his experiences as a soldier, and he appeared to the world seized up inside precisely because this was how he felt. It was possible for him all these years later to think of the German boy dying on the hillside and to feel his own heart pound as it had as he squatted against the tree, drinking from his canteen, his ears ringing, his legs trembling. (p. 154)（彼がどうにか出来ることではなかった。彼の顔は，兵士としての経験によって形作られ，彼自身がそう感じているように，心を閉ざされているように世間には見えた。あれから何年もたっているのに，あの山腹で死んでいくドイツ人の少年のことを考えることができる，木にもたれて水筒から水を飲みながら，耳が鳴り，足が震えていた時のように心臓が激しく打っているのを感じることができた。）

戦場は非現実的だった。最初のほど彼にとって苦しいものではなかったとしても，彼は戦場で「殺人」をし続けた。罪の意識は彼から消えることはなく，彼の心は，あの山腹を実際には「立ち去ったけれど，立ち去ることはなかった。（“He’d left there, and then he hadn’t left.” (p. 154)」

11）日系人からなる第 442 連隊への過酷な戦闘命令は差別的であることはすでに歴史の事実であろう。

彼は戦場に出ていく前の自分にはもどれない。

> The face in the hand mirror was none other than the face he had worn since the war had caused him to look inward, and though he exerted himself to rearrange it-because this face was a burden to wear-it remained his, unalterable finally. (p. 155)（手鏡の中の顔は，戦争によって内省的になって以来つけている顔で，重荷なので，どうにかして変えようとしたけれども，彼のであり続け，結局変えることができなかった。）

妻ハツエと３人の子ども，そして苺の香りの中を除いては，彼は，世界にも，自分の心の中にも暗闇を見続ける。一番悪いことは，彼には，その妻や子どもという家族の与えてくれる幸福に自分が値しないと思えることなのである。

> He saw only darkness after the war, in the world and in his own soul, everywhere but in the smell of strawberries, in the good scent of his wif and of his three children, a boy and two girls, three gifts. He felt he did not deserve for a moment the happiness his family brought to him (pp. 168–169)（彼には，苺の香り，妻や３人の子ども，男の子と二人の女の子，３つの贈り物の良い香りの中を除いては，世界にも，自分自身の心の中にも，暗闇しか見えなかった。彼は，自分が家族のもたらしてくれる幸福に値しないと感じていた。）

本当の意味での「生きる」,「幸福に生きる」を得ることができるためには，彼には障害が立ちはだかっている。日系人としてされた不正に対して，何の応答もなされていないことへの憤り，そして，自らの命さえ脅かすことになる殺人容疑と法廷での偏見に満ちた人々のもたらす不正への怒り，そして，彼を何よりも苦しめて「幸福に生きる」努力をするのに値しない自分だと思わせてしまう，戦場で自分のした「不正」，応答することが出来ない自分の不正の犠牲者，それらのために，愛する家族と生きているのに，カブオは完全には幸福に生きてはいない。

５．「生きる」―出来事の偶然性への「赦し」と「祈り」

無実の証拠メモを持ちながらイシュマエルに提出を迷わせたのが，彼の失った初恋であり，恋人ハツエであり，彼自身の腕であり，それら全てに彼が感じている「彼になされた出来事の不正」への思いである。空虚な生を強いられたという不正の被害者としての恨みから解放されることはそれまではなかった。しかし，ハツエが彼にあてた最後の別れの手紙を読み返し，イシュマエルは，ついに長い月日の後，彼が「生きる」ことを喪失した理由は，出来事にでも，ハツエの行為や腕にでもなく，ただ自分自身にあったことに気づくのである。

> He read the letter a second time, gravitating now toward its final words: “I wish you the very best, Ishmael. Your heart is large and you are gentle and kind, and I know you will do great things in this world, but now I must say good-bye to you. I am going to move on with my life as best I can, and I hope that you will too.” But the war, his arm, the course of things—it had all made his heart much smaller. He had not moved on at all…. He read her letter another time and understood that she had once admired him, there was something in him she was grateful for even if she could not love him. That was a part of himself he’d lost over the years, that was the part that was gone. (p. 442)（彼は手紙をもう一度読んだ。そして最後の言葉に引き寄せられた。「あなたの人生に最善を祈っています。あなたの心は大きくて，優しくて思いやりがあるから，私はあなたがこの世で素晴らしいことを成し遂げるとわかります。でも，私はお別れを言うしかありません。私も自分の人生を一生懸命生きていきます。あなたもそうしてください。」しかし，戦争が，

腕が，出来事が，彼の心を小さなものにしてしまった。彼は全く生きていなかった。（中略）再度彼は手紙を読んで理解したのだった。彼女はかつて彼を尊敬していたのだ。そして，たとえ愛することはできなくなっても，それに対しては感謝していたのだ。それこそが，長い月日の間に彼が失ってしまった彼の一部なのだ。無くなってしまっていたことなのだ。）

そして，彼が真実を告げる証拠のメモを持って，ハツエの元を訪れた後，ハツエは彼に感謝し，言う。“Live”(p. 446)（「生きて。」）「生きる」ことを始めたイシュマエルは，ついに理解したのである。それは，小説の最後に，イシュマエルによってタイプ打ちされる。

accident ruled every corner of the universe except the chambers of the human heart. (p. 460)
（「偶然が宇宙の全てを支配する。しかし，人間の心の奥の小部屋だけはそうでないのだ。」）

出来事は偶然性に満ちている。もしあの時，あのような事が起こらなかったら，あの人がそうしなかったらと反芻して思うことが，人生に一度ならずあるものである。まして，それが，自分ではなぜ起こったのか，その理由も，始まりも，個人に考えつくことができないような国家や民族の争いにまきこまれたためであったらどうだろう。そして，その中で，愛する人を失い，腕を失うというように，自分が主体となった選択が全く見出せないまま，自分が主体となって選択したはずの愛情さえ，その出来事の中で失うとしたら――イシュマエルに起こったことは，まさにこれなのである。しかし，最後に彼が行き着いたのが，出来事の残酷な偶然性に対しても保つことのできるものがある，それは自分の心の奥底にあり，そして，それに気づく限り，出来事自体が自分の生き方を侵害することはできない，という事実の認識であろう。出来事の偶然性や，出来事に関わり自分を傷つけたように思える他者の行動を赦すことも，その時から可能になるのである。

出来事の偶然性を赦せないまま憤りを抱えて生きる時，それは本来の「生きる」とは違っている。そして大多数の私たちがそれに捉われて生きるために，「生きる」ことを始めたイシュマエルは，この時点で十分ヒロイックなのである。しかし，重要なことは，彼の高みを強調しているのが，彼の赦しは，報復の機会として現れた選択肢を前に，正義をまっとうしたことで得られた，高みの境地であるということである。愛し合っていたはずなのに，一方的に彼に別れを告げ，別の男性と結婚したと思えるハツエにも，そのハツエを奪って結婚した男性にも，その二人の共通項でもあり，自分の腕を奪った敵であるものとしての「日本人」にも，すべて彼に生きることを不可能にさせていた不正なるものに，同じように不当なことを与える機会を与えたのが，彼だけが握った無罪の証拠のメモである。しかし，それを「報復」に使うのではなく，共有できる正義に生きようとする。この時点で，本当に「赦しえないもの」は「戦争」という出来事であって，その出来事の偶然性において，彼と同じように巻き込まれていたハツエやハツエの夫も，彼の腕を奪った日本軍も，彼と同じ立場であることは，理性ではわかってはいたのだ。それでも感情において，それらは「戦争」と同じく，自分を傷つけた不正な行為者に思えてきた。今や，「赦しえないもの」は「戦争」だけであることを完全に受け入れ，「戦争」という出来事への，少なくとも，その偶然性への赦しが可能となった。本論，第１節での「赦し」と違うのは，個人に特定することが不可能ともいえる集団による暴力行為の戦争に対しては，その「戦争」において彼にとって不正と感じられる選択を取った「彼等の側にあると思われた者達と彼等の行為」を赦すという感情に反映されていくことであろう。

この小説の映画版は，概ね原作に忠実に描かれているが，原作から創造したシーンが最後に加えられている。戦後の再会時彼女に一度だけ抱擁してくれとイシュマエルが頼み，拒絶された，その小説での起こらなかった「抱擁」である。裁判で夫が無実を言い渡された後，裁判所の外でハツエはイシュマエルに駆け寄り，自分から彼を抱擁する。ハツエの「生きる」ことも完全となった瞬間である。「生きる」ことをかつて選んだ彼女も，イシュマエルの取り戻した優れた人間性――公正さ，寛大さ――に対して，そして彼が「生きる」ことをまた始めてくれた喜びを持って，今は完全に「生きて」彼を抱擁することができる。そして，その抱擁を受けるイシュマエルは，かつてのイシュマエル以上の人間となって，そこに存在している。映画の最後にかすかに微笑んだように見えるイシュマエルは，自分らしさ，自分の本来のアイデンティティを取り戻しただけでなく，出来事の前には到達していなかった高みさえみせている。一時は「赦しえないもの」と思えた出来事の偶然性を彼は赦すことで，彼自身のアイデンティティはより高みに至り，変容したのである。

ハツエは，その後小走りにカブオのもとに戻る。法廷で「無表情な信用できない日本人」を象徴していたかのような，その無表情のカブオも，またイシュマエルと同じように，しかし本当に微かに微笑み，彼女の肩を抱く。不正義の連続の後，カブオもまた最後の判決では，初めて正義を得た。多くの不正の後，少なくとも一つの正義は彼に戻った。彼の山腹での記憶自体は消えることはないだろう。それでも，その記憶をドイツの少年兵という声なき他者に与えた不正の記憶として自らが留めて，それゆえ自分は幸福に生きることに値しないと感じていた彼だから，すでに出来事の暴力性を生きる努力において，他者と共有する正義にコミットする生き方をしていたとも言える。そんな彼だから，この裁判の後，赦しも祈りも与えられ，出来事の後をついに「生きる」ことができるのだろうし，彼の幸福もそこに次第に存在していくと感じられるのである。苺と家族の象徴する善なるものの香りが，暗闇を少しずつ消していくはずだ。彼の微笑に希望が見えるのだ。

戦争という暴力的な出来事の記憶を持って，その記憶が引き起こす複雑な感情を持って，人々は出来事を「生きる」しかない。ちょうど，ハツエが「愛して，愛していなかった」と感じたように，カブオが山腹を「立ち去ったけれど，立ち去ってはいなかった」ように，イシュマエルが忘れたいはずのハツエの最後の手紙を捨てずに持っていたように，出来事の暴力性は，説明が到底不可能な相反する感情を引き起こす。その感情の引き起こす混乱と痛みの存在を否定することなく認め，同時に，自分以外の他者との共有できる正義に生きようとすることは，当事者の多大な変容への努力でもってされるしかない。それゆえ，その高みでなされた赦しへの祝福も起こり得るのであり，自らも赦しをもらうという祈りも応えられるのであろう。ハツエの祈りをこめた別離を告げる手紙は，月日を経てイシュマルが再度生きることを促し，そして，イシュマルの赦しは，自身が生きることを可能にし，同時に，ハツエの夫カブオに初めて正義を戻す。カブオもまた，被った不正を赦し，与えた不正の赦しを祈り，生きるのだろう。こうして赦しと祈りは呼応しながら，関わり合った人々に再び生きることを可能にする。戦争という出来事の暴力性に，その過酷な偶然性に晒されながらも，出来事に影響されず，心の奥底だけは自分に存在することを信じて行為を選択することにおいてのみ起こり得る赦しは，人間が自らの力で実現し得る奇跡である。そして，この物語の中の三人がそろって幸福に生きることもそこから始まるのであるという点では，赦しはまさに，戦争という出来事の後の希望そのものなのである。

6．国家レベルでの「赦し」

前節まで述べてきたように，主人公達の「赦し」は，「戦争」という出来事の偶然性に左右されない心の奥底に従うという，いわば出来事の“偶然性”への赦しであり，また，「赦しえないもの」である出来事の中で「彼等の側にあると思われた者達と彼等の行為」を赦すという，個人のレベルにおける赦しである。その赦しにおいては，「赦しえないもの」である戦争という出来事自体も，その出来事の偶然性や暴力性に左右されない生き方をするという点で赦したとは言えるだろうし，個人のレベルではそれが唯一可能な，示し得る赦しの形なのであろう。

しかし，「赦しえないもの」である「戦争」を赦すということは，個人のレベルを超えて，国家単位で私達が直面しなければならない問題である。この国家レベルで考える時，出来事の赦しそのものは，非常に複雑な様相を呈してくる。過去から現在にいたるまで，どの戦争においても，「正しい戦争」と見なされた側と，見なされなかった側では，「赦す」ことも大きく異なるものとされ，その正しさを判定する側の意図によって，赦しそのものが規定されているのが現状である。デリダは，こうした主権的権力が存在しているがゆえに，赦しが純粋であるためには，「主権なき赦し」が理想であるのだとする[12)]。さらに，もう一つの条件は，「無条件」であること。罪人の改悛においてのみ考慮されるような「エコノミー的商取引き」であるべきではないのである[13)]。「戦争」のような暴力的行為に対して，「無条件の」「主権なき」赦しへの努力が望まれるというのである。しかし，実際に，これらが実現されていないことが，問題の複雑さを物語っている。

9.11 同時多発テロの後の世界のあるべき対応について論じた大澤は，「人道的介入」以外の他に二つの選択，「無条件の贈与」と「赦し」，が私たちにはあるという。「テロリストを最も困惑させること」は，軍事行動ではなく，テロリストを困らせることであり，テロリストにとっての「敵」が，テロリストの側から見ても「善」と映る，「正義」と映ることを行う，すなわち，テロリストに対して「喜捨＝贈与」をすることである[14)]。彼の挙げた例は，9.11 の同時多発テロの後で，例えば，世界で最も貧しい国で必要なものさえも事欠くアフガニスタンに，抗争するグループの別なく無条件に「贈与」するという，実際はそうされなかったことである。こうした「贈与」によって，テロリストにとっての「敵」であるはずの者が，実際は「敵」でないことが他のイスラム教徒に証明されるということになり，これが長期的にはテロリストの孤立を深め，テロリストの存在自体の意味を無くしていくこととなったかもしれないとする。大澤は，この彼自身の提案に，これこそ意味がない，不可能だという反論は当然あるだろうと認めた上で，しかし，この「無条件の贈与」こそが，軍事行動よりは効果的なテロへの対策であると言う。そうした「無条件の贈与」を「彼ら」にし得る時，大澤がいう「赦し」にもなる[15)]。「赦しえないもの」として排除しようとしていた敵に対する「赦し」の行為――「互いに『赦しえないもの』として排除していた相手に同一化すること」――を行う時に，自分達も「変容しうる」者として向き合うことになる。どちらにも共通で認められる普遍的な正義や善は存在しない以上，「変容しうる」者という点に両者の共通性を見出すのである。「アイデンティティの根本的な変容を必然的に伴

12） デリダ，p. 108.
13） デリダ，p. 93.
14） 大澤真幸 『文明の内なる衝突』日本放送出版，2002，pp. 232–233.
15） 大澤，pp. 234–235.

う」，その「赦し」の行為においてのみ，この共通項としての「変容しうる」という普遍性は存在する。アイディンティの変容と「赦し」について，大澤はこう説明する。

> もしわれわれが，赦しえないこと，とうてい赦すことが不可能なことを赦すとするならば，「われわれ」は必然的に変容する。このような赦しは，アイデンティティの根本的な変更を伴わないわけにはいかない。赦すことが不可能なことを赦すということは，われわれが，自分自身のアイデンティティを定義している最小限の規範――これが「赦しうること」の範囲を規定している――すらも，放棄することだからである。赦しえないことを赦すときには，私は自らの視点を離脱し，その「赦しえないこと」を不可能なこととして――ときには善や正義として――肯定していた他者の視点の内に参入しているのだ[16]。

その「赦し」は，「罪のないアフガニスタンの人々への空爆をやめろ」という戦争反対のレトリックから引き出せる「罪のある者への空爆はかまわない」という含意への疑問にも繋がっている。なぜなら，罪のある者と，そうでない者との境界は曖昧で，相対的だからである。過去の戦争行為にも多く見られる論議――罪なき人を殺したのか，罪のある者を殺したのか――で明瞭である。だから，

> 厳密に言えば，われわれは誰ひとりとして，無実ではない。逆に言えば，「無実」の人びとを救いたければ，われわれは，明白に罪を担っている人々も赦さなければならない。罪を償ったから赦すのではなく，罪人のままで赦さなくてはならないのだ[17]。

「正義は単におこなわれねばならないだけでなく，目に見える形でおこなわれねばならぬ」――というように正義の，速攻の目に見える形にこだわれば，国家レベルの報復になる可能性の方が強い。正義は，そこに存在することが誰にも感じられる形で，時間をかけて求められればいいはずなのだ。田崎，崎山，細見の対談をまとめた本の中に「赦し」について語る箇所がある。「差し当たって切羽つまっているからこそ，赦しとか寛容という問題が同時にでてこなければいけない[18]。」同時に，予期できない状態で起こる出来事の連続に，今差し迫った感を持つ者が多いからこそ，正義が問われているのだとも言う。彼等も，もちろん普遍的な正義の状態は存在しないことは認める。しかし，私達が，「あったこと，予想もつかずに起こったことに対して，不正を働かずに，むしろ，“正義”というものを実現することができるか[19]」と絶えず問い掛ける必要があるとし，その正義とは，結局は，

> 「何が起こってもあなたに報復しません」ということです。万人がそれに同意するというか，誰か一人だけではなく，みんなが心の底から和解して「もう何があっても絶対報復しません」というふうになることが正義を実現するということでしょうね[20]。

そして，そうした「正義」を，まず持つことの方が，「薄っぺらな正義だ」とあざ笑うことより大事なことであり，「赦し」もそこに存在すると言う。すなわち「報復する権利をみんなが放

16） 大澤，pp. 233–234.
17） 大澤，p. 226.
18） 崎山政毅，田崎英明，細見和之 『歴史とは何か』河出書房新社，1998，p. 94.
19） 崎山，他，p. 99.
20） 崎山，他，p. 89.

棄すること以外に正義の実現はない」ゆえに，私の側には，その可能性に対して「祈り」があり，他者には「赦し」がある[21)]。

Snow Falling on Cedars で，検事は，裁判の始まりからずっと偏見に囚われ，決定的な証拠もないにも関わらず，日系人であるカブオの有罪を当然のように扱い，それは最終弁論まで変わらない。その直後，弁護士は以下のように述べる。

> I am like a traveler descended from Mars who looks down in astonishment at what passes here. And what I see is the same human frailty passed from generation to generation. What I see is again and again the same sad human frailty. We hate one another; we are the victims of irrational fears. And there is nothing in the stream of human history to suggest we are going to change this. But—I digress, I confess that. I merely wish to point out that in the face of such a world you have only yourselves to rely on. You have only the decision you must make, each of you, alone. And will you contribute to the indifferent forces that ceaselessly conspire toward injustice? Or will you stand up against this endless tide and in the face of it be truly human? (pp. 418–419)（私は，ここで起きていることを驚いて見下ろしている火星からの旅人のようなものです。私が見ているのは，世代から世代に受け継がれてきた同じ人間の弱さなのです。私たちはお互いに憎しみ合う，不合理な恐怖の犠牲者なのです。そして，私たちがこれをかえるであろうということを示唆するようなことが人間の歴史にはないのです。しかし，脱線しましたね，認めます。私は，ただ，こうした世界において，あなたが頼ることができるのは自分自身だけなのだということを指摘したいのです。つまり，あなたが，あなた方の一人一人が，決断を下さなければならない。不正義のために絶え間なく企む無関心な集団の助けとなろうとするのか，それとも，この終わりなき流れに立ち向かい，それに対峙して，真の人間であろうとするのか。）

陪審員に向けられているために，“each of you”，つまり「あなた方の一人ひとり」の決断だと特に強調して言っていると取れよう。しかし，同時に，この言葉は，全ての人々一人ひとりに向けられていると感じるだけの感受性を私たちが持ち得る限り，そうではなくなる。一人ひとりがまず二つの最初の選択肢を与えられている。出来事の「不正義」の側に立つ「無関心な人間」でいるか，出来事に対峙して「真の人間」であろうとするか，という選択である。私達が選択するべきは，後者，すなわち，「彼等」と「我々」で共有できる正義の実現に対する強い願いを保持し続けること，「正義の実現が可能でない時・場所で起きた不正」に対しても，報復ではなく赦すことが出来る人間であろうとすることである。そして，その赦しは，個々の出来事において，自らが変容しうるものという普遍性において他者と向き合うことから実践するしかない。国家レベルの赦しの実現は，あまりにも複雑で困難だからと，そのための努力に無関心であるのではなく，また，赦しが国家レベルの問題であることを理由にして個人のレベルでの自らのコミットメントの欠如を正当化してしまうのでもなく，ともかく今いる場からまず「真の人間」であることを始めようとする者だけが，自らの祈りの声を他者の赦しにまで届けられるのである。

お　わ　り　に

2012 年，そうした今ある場で声をあげている者の一人である，アンジェリーナ・ジョリーが脚本・監督を務めた，90 年代のボスニア・ヘルツェゴビナ紛争を描いた映画，*In the Land of Blood and Honey* が公開された。このジェノサイドの起こった時に 17 歳であった彼女は，真の苦

21）　崎山，他，p. 134.

痛は理解していなかったと言い，今回の映画製作のためにただただ学び，「真実」を伝え，「人々に敬意を表そうと」したという[22)]。2月のベルリン国際映画祭での特別上映に登場した彼女が，紛争に対して早い段階で何かがなされていたら，ここまで酷くはならなかったと語った時，客席から「今のシリアがそうだ！」と声がかかった[23)]。

そのシリアで子ども達が4百人殺されたという文字が，同じ月のニュースにあった。国連介入がロシアと中国の否決権でもって不可能となった直後，CNNニュースでは，「私達を見殺しにしないでくれ」と搾り出すような声でシリア人の男性が現状を訴えてもいた。この「出来事」の後を当事者の人々が生きる時，「彼等」が「生きる」ための赦しは一体誰に与えられるべきなのだろうか。殺戮者，そして，「彼等」に進行中の出来事を安全な場所で語ることができる私を含めた世界なのだろうか。8月，そのシリアで取材中の日本人ジャーナリストの山本美香さんが銃撃に巻き込まれて死亡したニュースを受けて，シリアでの出来事を初めて自分に近いものとして感じてしまう，そうした私達なのだろうか。

上記のようなジェノサイドのような出来事の後の赦しについては，あらためて考えていく必要があると思われる。「我々の愛国心」「我々の正義」と「彼等の愛国心」「彼等の正義」の共有項を正義の観点で求め，その上で自らも変容しうる者として他者と向き合うとする枠組みから明らかに外れてしまう。「私達の正義」を振りかざし，一方的な武力行使により「非力におかれた彼等の破壊」がなされる「人道上の罪」としてのジェノサイドの場合も，不正の罪が裁かれて，同様に「赦し」が存在するのであろうか。ジェノサイドでは，出来事は報道され，世界は沈黙し，そして犠牲者は存在しなくなる。一体，「誰が」「誰を」赦すというのだろう。ジェノサイドのその性質において，犠牲者達は「消滅させられている」のであり，その記憶自体の抹殺が図られているのだから[24)]。そして，多くのジェノサイドは，その進行中に，程度の差こそあれ，「外の世界は知ってもいた」のであるから[25)]。ナチスのホロコースト，ボスニア，カンボジア，東ティモール，ルワンダ，ソマリア，スーダン，そしてシリアと。もし「過去に人類に対して犯された

22）“Possessed by War,” *Newsweek*, December,12, 2011.（“At the time, I had no idea of the extent of the agony.” “For the film, she ‘read a lot of books about the war. I talked to a lot of people, I watched, I listened. I just wanted to tell the real story.’ She repeated what she has said several times. ‘I wanted to be respectful of people.” If she did not know something, ‘I asked.’ ”）

23）「アンジェリーナ・ジョリーが明かす紛争で苦しむ人々への思い　ボスニア内戦を扱った初監督作上映『第62回ベルリン国際映画祭』」シネマトウデイ，2012年2月．

24）同時期，日本でも，中国でのジェノサイドの否定の根拠が「目撃者がいない」とした政治家の発言がニュースとなった。「『目撃者がいない』が根拠＝南京事件否定発言で―河村名古屋市長」（時事通信2012年2月22日）「名古屋市の河村たかし市長は22日，都内の日本記者クラブで会見し，旧日本軍による1937年の南京事件を「なかったのではないか」と発言した根拠について，「目撃者がいないのが決定的だ」と説明した。……市長は会見で，旧日本軍が南京入りした当時の状況について「欧米メディアが『日本人が虐殺をした』と伝えたのは伝聞情報だ。はっきりした目撃情報がない」と強調。」他国の共同体の記憶となっているジェノサイドについて，このような発言をする行為は置いておいて，少なくとも，彼の言っている根拠は，ジェノサイドの特徴である。被害者の抹殺自体を目的とするジェノサイドでは，ジェノサイドを否定したい加害者だけが目撃者として残ることが多いのである。

25）山本美香さん死去のニュースから。「紛争地の女性や子どもの現実を，私が生きて帰って知らせる。」「戦争ジャーナリストじゃなくてヒューマンジャーナリスト。娘を誇りに思っています。」（（共同通信8月23日）「『山本さんは「報道で戦争は止められるのか？』という質問を一番に挙げ，『そういう願いがあるからこそ続けられる』と記した。」「メッセージの最後はこう結ばれていた。『社会にはさまざまな考え，職業，立場の人たちがいます。メディアの世界に身を置くと，力を持っていると勘違い↗

あらゆる罪」について告発を始めたら，「地球上に誰一人，無実の人」はいないとデリダが言ったような[26]，恐ろしい真実への慄きがそこにある。このジェノサイドという出来事の後を「生きる」ことに関しては，次稿で考察を続けたいと考えている。

［2012. 9. 27　受理］

↘ してしまうことがあります。高みから物事を見るのではなく，思いやりのある，優しい人になってください』」（「山本さん死亡 「報道で戦争止める」学生に残した願い」毎日新聞　8 月 21 日）山本美香さんに「世界」の全ての者がなれるわけではない。それが，彼女へ私達が持つ強い尊敬の念の理由でもある。しかし，全ての者が彼女の伝えることを知る努力は出来る。知ろうとしないことを恥いることは出来る。「思いやりのある，優しい人」の意味することを考えることは出来る。アンジェリーナ・ジョリーが，映画に関するインタビューで語っているのも，その「世界」である。“I feel very strongly about it [the film] and I believe that its core issue-which is the need for intervention and need for the world to pay attention to atrocities when they are happening – is very, very timely and especially with things that are happening in Syria today,” Jolie told journalists.（Jolie: Bosnian war film should be a wake-up call,” *The Daily Yomiuri*, February 17, 2012）“It’s strange thing to say as a director and a filmmaker, but I want people to be very uncomfortable when they watch it, and they should be upset and they should want some intervention, and they should want it to stop and they should be angry.”（“Julie wants new film on rape to make people uncomfortable,” *The Daily Yomiuri*, February 18, 2012.）

26）デリダ，p. 90.